

御所浦にも水俣病？

遺族から訴え 11年前死亡の漁師

『隠れ水俣病』の実態をつかむため熊本大第二次水俣病研究班

(代表・武内忠男病理解学教授)が住民検診をしている水俣市対岸の離島—天草郡御所浦町で「十一年前の父の死は水俣病が原因ではないか」と訴える家族が現われた。病状は水俣病特有のもので、現地の研究班では二十八日にも直接家族に会い調査を始める方針。有機水銀中毒が水俣湾周辺だけでなく、どの程度まで対岸の天草地方に及んでいたかを知るうえで有力な手掛かりを得るものとみられる。

訴えによると、十一年前に死亡したのは同町の漁業Aさん(当時五十八歳)。家族の語ではAさんが原因不明の病気になったのは水俣病が多発した三十三年。「それまでは村一番の二匹若者、病気にかかったことはなく、魚が好物で毎日樽ごと食べていた」という。

水俣病は手足のしびれ、ふるえから始まり、よだれ、知覚や言語障害、難聴、歩行困難、視野狭さくなどがおもな症状。病状が進むにつれ知能障害も現われてくる。

家族らがAさんの異常に気づいたのは手がふるふる細えるのをみたとき。「アル中でもないのにおかしい」と家族らは首をかきつけたという。そのうちよだれを流し始

め、ことはがもつれて話せなくなつた。

晩年は難聴になり意識ももうろうとして、家人識別すら出来なくなつた。食物は口にうまく運べずボロボロとこぼす。聞いかけにも全く反応がない。ついには歩けなくなり、オーオーと奇声を発しながら床をはい回つた。地元の町立診療所にAさんを連

れ検診してもらつたが、病名がわからないまま三十五年十二月死亡した。

三十五—三十七年当時、県衛生研究所が不知火海沿岸住民の毛髪を集め水銀量を調査したことがある。このときAさんの長女(この毛髪から四八PPM(日本人の平均値は二—三PPM)もの水銀が検出された。